

さくらやま便り

No.327号 2021年（令和3年）12月15日



夏の思い出（最終回：熊本～鹿児島編）



すっかり寒くなり、いよいよ「師走」の文字も走り始めました。これからクリスマス、お正月と日本は慌ただしい時期に入ります。

さて、走ると言えば話は夏を引きずる「九州の旅」です。今回が最終回になりますが、コロナ禍の暗い話が多い中、少しでも「ほっこり」できれば幸いと書き始めましたが、拙い昔話にお付き合い頂くことにいささか後ろめたさも感じます。

さて、お弁当屋さんで頂いたお昼の「お弁当」を走り出してすぐにお腹の中に流し込み、「昼のご飯は昼に考えよう」という「行き当たりばったり」な適当さがこれまで偶然にも良い結果に結びついている幸運を「当たり前」と思うほど自惚れてはおらず、これからどんな事が待っているのだろうとワクワクしながら熊本を後にしました。

熊本から鹿児島までは、暫く海岸線を走りました。その景色の美しさはもう見事なもので、陽光がキラキラと輝く水面に自分の未来を想い描きながら、誰に気兼ねすることなく人生の主人公を演じ切る辺りは、脳天気と言う他なく……。我がことながら、青二才の妄想のなんと恥ずかしくも幸せなものかと感心さえ致します。

鹿児島市内に入っただけ、突然、市内を黒雲が覆いはじめ、あれよあれよという間に「変な物」が空から降り始め、それは瞬く間に車や街路樹に

積り、市内がまるでモノトーンの絵の中に入り込んだような錯覚に陥るくらい暗く、そして不気味な静けさに包みこまれました。「桜島の噴火」でした。灰が降り始めたのです。それを避けるために家の軒下に身を隠しました。程なくして、突然窓が開き、「危ないから早く入りなさい」とその家のご主人が中に入れてくれました。「どこから来た？」「広島です」「広島？で、どこまで行く？」「沖縄です。実家です」。そんなやり取りの後、結果的にその家に一晩泊めて頂くことになりました。以前、その方の息子様がお使いになつていたというお部屋の壁には、ご家族で写した写真が飾ってあり、その傍に「一期一会」と書かれた色紙が掛けてあったのを覚えています。「出会い」や「人の温もり」等、私は他者との関係の中で自分の存在を認識させられたわけで、他人様によって生かされている現実を、その夏、強く体験することができました。

フェリーの甲板に立って見つめる九州は、そこに生きる人々の暮らしと共に夏の日差しに青く燃えており、この旅で出会った方々の思い出といっしょに静かに海の向こうへと消えていきました。

さて、寒さも増して冬本番です。どうぞお身体を「ご自愛下さり、お元気に新年をお迎え下さい。希望に満ちた一年を心からお祈り致します。

施設長 村本 英邦

寒さに向って

金元 知子

「要介護4」の寝たきりから立ち上がった、歩き走り、一人で入浴、洗濯も頼まず一人でするようになった。床も水拭きにする。そうなった私を職員の田中さんは「見事だ」とほめてくれた。

日々鍛錬である。それが出来てくるのが楽しく嬉しい。この冬の寒さは厳しいらしい。大丈夫！乗り切れるでしょう！
生きている限り、私はそうして生きる。



短歌

大畑 繁雄

足引きの
桜の山の

コナラの樹

朝日に映えて
黄金と輝く

私の90年に及ぶ人生の終末期の話

308号室 小坂 宣雄

15年程前、引き揚げて来た旧満州南西部の都市「錦州市」からの引揚者会、錦州会の会長を担当中、静岡に転居されていた前会長が亡くなられ、その葬儀に参加した際、会場にあったパンフレットの中の一つに横浜で水葬を扱うものがありました。何れ私共夫妻の墓地を求めなければならぬ事を感じて居りましたので、子孫に墓守の世話を掛けなくても済むのでは？と考え、家内の「かをる」と相談する予定で帰途につきました。

一方、かをるも同様な思いを持って居た様で、戸塚区にある大きな公園の中に「集合墓地」を作るパンフレットを見て、私が不在の日に近所の奥さんと下見して来た様でした。家内かをるは、大勢で入れる集合墓地では寂しくないのでは？と考えた様でした。しかし、私の持ち帰った「水葬」は聞くなり「私はいや！」と一言。「甲府育ちの私は泳げないから」がその理由でした。

戸塚の墓地は受付開始当日に申し込みに行き、番号は忘れましたが100番以内でした。抽選日に確認に行きましたら、なんと50倍の申し込みがあつて、100番以内では2枚当選していました。もちろん「ハズレ」でした。処がその直後、鎌倉の墓地幹旋業会社の社員が、保土ヶ谷カントリーゴルフ場の東側に

ある墓地のあっせん勧誘に来ました。ゴルフ場越し西方3キロには、50年程以前に住んでいた当時戸塚区、現在の瀬谷区細谷戸県営住宅地があり、たまにはありました。保土ヶ谷カントリーゴルフ場でプレーした事もあり、場所的にも又価格的にも適当な墓地でしたので、夫婦二人の望みの一致したスタイルの墓石を含めて決めました。

旧大連生まれ、旧満州育ちの私ですが、その年月を含め今迄の90年に亘る私の人生は、ここシャローム桜山施設で旧知の想い出の多い地に囲まれてまっとう出来る事と願って居ります。

年末年始のスケジュール

- 12月16日(木) ゆず湯
- 12月25日(土) クリスマスディナー
- 12月31日(金) 年越しそば
- 1月1日(土) 正月祝膳

職員人事のお知らせ

退職 職員氏名 佐藤 里香
退職日 令和3年12月31日付

12月「入居のお知らせ」

206号室 山上時夫様・洋子様

だの1日だけでした。他の1567日は、それを破壊するためだけに費やされたのでした。

あのクリスマス・イブに村々を駆け巡り、小さなクリスマスツリーとキャンドルを、所属の隊長の命令により調達した、第17バイエルン連隊所属の民間兵士カール・ミューレツヒが後に記しています。「凍てつく塹壕で、兵士たちと、母国ドイツと、そして世界の平和を願うと言いつつ、隊長がキャンドルに灯をともした時、私はかつてなかったほどに、戦争の狂気さを身に染みて思い知らされた」と。

人間の究極の残酷さと優しさを表すもの、それがクリスマスなのかもしれませんね。



12月生まれの皆様

23日 加藤 のぶ子 様

24日 齊藤 祐子 様

お誕生日おめでとうございます。寒さも増してきますので、お身体を大切にお健やかな毎日をお過ごし下さい。

白内障手術

齊藤 勇夫

「身体髪膚これを父母に享く。敢えて毀傷(きしょう)せざるは孝の始め也」の教訓に従いつつ、何れ遠からず焼場にて処理される身体、「投資は無意味」と決めていた。しかし最近急激に視力が限界に近付き、意思が脆くも崩れ「敢て毀傷」することにした。

数年前、妻が横浜保土ヶ谷眼科にて両眼白内障手術を受け、人生観が変わる程の好結果だったらしい。「主人の顔がこんなに醜いとは知らなかった」と、シミ・皺・あばた・傷跡などが総てが鮮明に確認できたとか。「何処かで誰かと入替わったのでは…」と疑われた。また、私に白内障手術を強く薦めていた同級生の友人は手術半年後に急逝。儂く虚しい余生だった。妻や友人の手術讃歌に踊らされることはなかったが今年になって事情が急変した。視界が常に「見渡す限り霞か曇か」状態。黒は灰色に白は薄茶色に、一万円札は二万円に見え、活字を追う作業が極端に苦痛になった。止む無く決断した。

11月17日、遂に組上(そじょう)の鯉となつた。先ず左目手術。「複数の局部麻酔をブスツ、次に黒目にメスをグサツ、ギヤー」の修羅場を覚悟したが、何も無かった。手術直前、散瞳薬を5分毎に二十数回点眼され首が痛かつ

た。愈々手術室に入った。組上でどう料理されたかは判らず、混濁した水晶体を抜き取る瞬間、軽く沁みる感じがあった。人工レンズ挿入操作は気付かなかった。約15分で終わった。次に右目は11月24日、同じ手術を受け12分だった。術後合計10日間、入浴、洗髪、洗顔を控えたため、不快な不潔感に対する忍耐が想定外の苦痛だった。

93年間の風雪に耐え共に闘ってきた老いた眼球水晶体さん。「さようなら！ありがとう！」。今回の手術が正解だったかどうかは判らない。しかし予想以上に視力が改善し視界が明るくなった。シャローム桜山自室の淡黄色の壁が見たこともない純白色。爽やかに目に沁みた。気付かなかった洗面台鏡の汚れを拭き取り、想像を絶する老醜が映し出され愕然。落胆失望した。しかし活字拒絶反応は完全に消滅した。今後は漢詩でも学びつつ短歌を詠み、肅々と心豊かに余生を暮らしたい。

お知らせ

11月から、来年3月までの5か月間は「冬季加算」が請求書に追加されますのでお知らせします。

ご不明な点がございましたら、事務所までお申し出下さい。

知られざるクリスマス

板東 洋三郎

その日朝から続いた銃声が夕刻になって止み、戦場に夜のとぼりがおりつつありました。蛇行するドイツ軍と英国軍の塹壕の間隔が、100メートル足らずの、ある地点で「事件」は起きました。英国軍の哨兵が敵軍を見ると、塹壕から赤や緑の光が闇に輝いています。それを知って出て来た兵士たちは、驚きと不信で無言のまま立ちすくんでしまいました。すると、突然敵の塹壕から聞きなれた懐かしいメロデーが聞こえてきたのです。

しばらくそれを聞いていた兵士たちの口から、誰が言うともなく自然に、敵地からのメロデーに合流するかのような歌声が夜空に流れ始めます。ドイツ兵は“Stille Nacht”を、英国兵は“Silent Night”を、それぞれ自国語で幾度も繰り返し歌いました。敵陣の歌声が止み、赤や緑の光も消えると、兵士たちはそれぞれの思いを胸に、無言で再び塹壕に戻ります。第一次世界大戦勃発から5か月ほど経った、1914年12月24日に西部戦線のある地点で起こったことです。

オーストリア・ハンガリー帝国の王位継承者が、ユーゴスラビア人の国粋主義者に暗殺され

て1か月後に始まった第一次世界大戦は、ヨーロッパを二分し、後にロシアやアメリカも参戦し、世界戦争へと発展しました。8月から12月までのわずか4か月で、ドイツ兵11万6千人、オーストリア・ハンガリー兵18万9千人、英国兵16万2千人、ベルギー兵3万人、フランス兵30万人が戦死しています。東部戦線では200万人ものロシア兵が同じ時期に戦死しています。

翌12月25日の早朝、英国軍の哨兵が敵陣に見たのは、素手を上げて振っている一人の兵士でした。見ているとさらに多くの丸腰の兵士たちが、鉄条網を潜り抜けて中間地帯にやって来ます。攻撃の意図がないことが分かった英国兵も続々と中間地帯に向かいます。彼らは、いつも自然に、握手し、抱擁してクリスマスを祝います。タバコや缶詰を交換する者もいます。そこにいた兵士の証言によると、ドイツ兵が一番喜んだのは、英国のメリー王女から海外派遣軍に贈られた砂糖菓子とたばこの入った小さな缶であり、英国兵が喜んだのは、Gott mit uns（神われらと共にいます）と鑄こまれたドイツ兵のベルトのバックルであったと言います。

思いもよらぬ楽しみの中にあつた兵士たちですが、銃撃に倒れ埋葬されることもなく放置されていた200人にも及ぶ両軍の犠牲者を忘れ

ませんでした。敵同士であつた兵士たちが、奇しくも同じ中間地帯に埋葬されたのです。彼らはそれぞれの自国語で詩篇23編を朗読し、ドイツ兵たちが食糧の箱板で作つた小さな十字架を戦友の墓に立てて弔いました。

しかし、平和な時は長くは続きませんでした。この出来事を知つた、英国の海外派遣軍総司令官のジョン・フレンチ卿は激高し、以後、敵兵と交友を持つような違反があれば極罰をもって臨むとの命令を出しました。厳しい軍規で知られたドイツ軍からも同様の敵命が出されました。そして、このような出来事は再び起こることはありませんでした。

短い平和の時が過ぎ、再び敵味方に分かれるとき、一人のドイツ兵が言います。「きょうは、我々の双方に平和があつた。明日は、君たちは君たちの国のために、我々は、我々の国のために戦う。幸運を。」

戦争は国家と国家の争いです。兵士は、殺戮と破壊の道具としかみなされません。人間性の基本である良心の自由も人権も無視されます。3人に1人しか生還しなかつた西部戦線の兵士たちも、それぞれの塹壕で、自国語で讚美歌を歌い、あの中間地帯で敵味方が握手をし、抱擁しあつたとき、自分も敵も人間であることを認め合い、共に喜んだのです。しかし、それはた